

日本社会心理学会会報

213号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

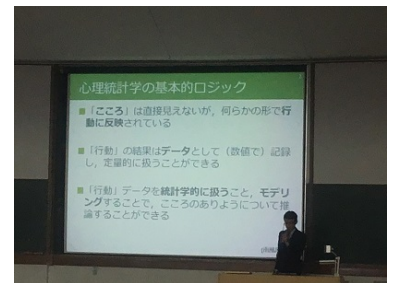
2017年3月23日

第4回春の方法論セミナー・開催速報

2017年3月14日に、新規事業委員会企画による第4回春の方法論セミナー「効果の科学からデータ生成過程の科学へ:心理学者のためのベイジアン・モデリング入門」が上智大学四ツ谷キャンパスで開催されました。

学会Webサイトからご覧いただけるとおり、「効果の有無」では捉えきれない重要な問いを解決するためにベイジアン・モデリングの世界に踏み込むべし、という企画者の熱い思いでもって、岡田謙介先生と国里愛彦先生(いずれも専修大学)という斯界の最先端の研究者を講師にお招きしたこの機会に、会場には152名(うち会員67名)が集いました。またUstreamによる生中継も多くの視聴があり、いくつかの大学では「パブリックビューイング」も開催されたと聞いています。今回は、会場運営には上智大学の皆さんにご協力をいただきました。ありがとうございました。

ご講演の様様や資料のうち、講師の許諾の得られたものを学会Webサイトで公開しております。また、当日の様様と参考資料については広報委員会によるまとめをご参考になれば幸いです。毎回、学会内外に反響の大きいこの春のセミナー企画、今から次回も楽しみです。なお、次号(214号)に参加記を掲載します。



第29期役員選挙のご報告

結果報告

第29期選挙管理委員長 堀毛一也

第29期の役員選挙は、第57回大会総会で承認いただきました役員選挙規程に基づき実施いたしました。また、今回から投票方法がオンライン投票に一元化されました。投票期間は2016年11月1日から21日までとし、期間中、投票を促すメールを2回お送りしました。役員選挙の開票に際しては、選挙管理委員4名(堀毛一也、藤島喜嗣、戸梶亜紀彦、小林麻衣、藤島喜嗣)と事務局担当(古川佳奈)が集計結果を確認し、当選者、次点者、次々点者を決定いたしました。2016年11月27日に役員選挙の開票、1月10日に会長指名常任理事の信任投票の開票、1月22日に理事互選による常任理事選挙の開票を行いました。いずれの選挙におきましても、同数の得票に関しては、複数の選挙管理委員により抽選を行いました。以下、開票結果をご報告いたします。

役員選挙における有権者数は1,413、投票総数は329、投票率は23.28%となりました。投票率は第26期が25.7%、第27期が25.6%、第28期が23.4%でしたので、前回並とはいえず、漸減傾向が継続しています。区分ごとの得票数、投票率は、表1をご覧ください。開票は、会長、全国区理事、地方区理事、監事に分けて行いました。それぞれの区分での開票時点または最終時点での当選、次点、次々点までの結果は、表2から表8をご覧ください。得票が同数の場合、重複しての当選の場合などについては、役員選挙規程に則って処理しました。開票終了後、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、すべての当選者から就任の承諾を得て、2016年12月12日にすべての役員が確定しました。

第29期の会長に当選した浦光博氏から、編集担当常任理事として岡隆氏、事務局担当常任理事として西村太志氏の指名がありました。2016年12月19日から2017年1月7日に理事による信任投票を実施しました。その結果、2氏とも信任24票、不信任0票を得て信任されました。

残り4名の常任理事を選出するために、2017年1月12日から20日まで理事による互選を実施しました。当選者に就任の承諾を尋ねたところ、唐沢かおり氏からは承諾が得られたものの、3名の当選者が就任を辞退されました。そこで、開票時点の次点と次々点2名の計3名を繰り上げ当選とし、あらためて次点、次々点を決定しました。この際、同票が4名でしたので、抽選により第1位から第4位までの順位を決定しました。繰り上げ当選となった工藤恵理子氏から就任の承諾は得られたものの、2名の繰り上げ当選者が就任を辞退されました。そこで、あらためて繰り上げを実施し、当選された坂田桐子氏、宮本聡介氏より就任の承諾を得ました。最終的に2月6日をもって、唐沢かおり氏、工藤恵理子氏、坂田桐子氏、宮本聡介氏の4名の常任理事を確定しました。

以上で、第29期の役員が全員確定したことをご報告いたします。

選挙管理委員会からのコメント

会長推薦理事の信任までは例年通り順調に推移しましたが、最後の常任理事の互選で、辞退される先生方が5名おられました。昨期の選挙では2名の辞退、それ以前の4期では辞退された方はほとんどおられません。今回は、各先生ご事情があったことが重なった結果の異常事態としてとらえるべきかと思いますが、今後に懸念を残すことは事実です。常任理事会・理事会で、今後の対応策をご協議いただければ幸いです。なお今回は、現会長と協議のうえ常任理事の得票数を明示しないことにしましたのでご了承いただければ幸いです。(文責:堀毛一也)

表1 第29期役員選挙投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率
会長	1413	329	23.3%
全国区理事	1413	329	23.3%
地方区理事(北海道・東北)	89	29	32.6%
地方区理事(関東)	682	150	22.0%
地方区理事(中部・近畿)	486	108	22.2%
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄)	148	41	27.7%
監事	1413	329	23.3%
海外	8	1	12.5%

表2 第29期役員選挙開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
浦 光博	126	1	○
亀田 達也	24	2	次点
唐沢 かおり	17	3	次々点
小計	167		
次々点未満	139		
白票	20		
合計	326		

表3 第29期役員選挙開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	当選者
唐沢 かおり	101	1	○
岡 隆	84	2	○
結城 雅樹	24	3	○
西村 太志	19	4	○
内田 由紀子	10	5	○
松井 豊	10	5	○
石井 敬子	9	6	○
安藤 清志	8	7	次点
大坪 庸介	8	7	次々点
小計	273		
次々点未満	317		
白票	68		
合計	658		

表4 第29期役員選挙開票結果(地方区理事:北海道・東北)

氏名	得票数	順位	当選者
高橋 伸幸	6	1	○
今在 慶一郎	4	2	次点
結城 雅樹	3	3	次々点
小計	13		
次々点未満	14		
白票	2		
合計	29		

表5 第29期役員選挙開票結果(地方区理事:関東)

氏名	得票数	順位	当選者
樋口 匡貴	40	1	○
森 津太子	39	2	○
松井 豊	13	3	全国区で当選
岡 隆	9	4	全国区で当選
宮本 聡介	9	4	○
尾崎 由佳	9	4	次点
伊藤 忠弘	8	5	次々点
村本 由紀子	8	5	
小計	135		
次々点未満	224		
白票	91		
合計	450		

表6 第29期役員選挙開票結果(地方区理事:中部・近畿)

氏名	得票数	順位	当選者
小川 一美	22	1	○
斎藤 和志	21	2	○
池田 謙一	9	3	次点
遠藤 由美	8	4	次々点
小計	60		
次々点未満	136		
白票	20		
合計	216		

表7 第29期役員選挙開票結果(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄)

氏名	得票数	順位	当選者
池田 浩	14	1	○
森永 康子	3	2	次点
中西 大輔	3	2	次々点
小計	20		
次々点未満	14		
白票	5		
合計	41		

表8 第29期役員選挙開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者
遠藤 由美	16	1	○
池田 謙一	7	2	次点
松井 豊	7	2	理事に当選
大淵 憲一	7	2	次々点
小計	37		
次々点未満	209		
白票	83		
合計	329		

表9 第29期役員選挙開票結果(常任理事)

氏名	順位	当選者
唐沢かおり	1	○
樋口匡貴	2	辞退
五十嵐祐	3	辞退
亀田達也	4	辞退
工藤恵理子	5	○
結城雅樹	6	辞退
松井 豊	6	辞退
坂田桐子	8	○
宮本聡介	8	○
唐沢 穰	8	次点
池上知子	8	次々点

第29期常任理事会・担当

	新(第29期)	旧(第28期)
会長	浦 光博	村田光二
事務局担当	西村太志	藤島喜嗣
編集担当	岡 隆	沼崎 誠
大会運営担当	坂田桐子	坂田桐子
広報担当	宮本聡介	三浦麻子
学会活動担当	工藤恵理子	山口裕幸
研究支援(新設)	唐沢かおり	—
渉外担当(廃止)	—	唐沢 穰
新規事業担当(廃止)	(会長預かり)	竹澤正哲

2016年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」 候補者の選考経過と選考結果

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山口裕幸

2016年度の「若手研究者奨励賞」候補者は、本年度も、42件の多数のご応募をいただきました。4名の選考委員による厳正な審査の結果、以下の6名を受賞者と決定致しました。受賞者の皆さん、おめでとうございます。良い研究成果を心より期待します。なお、選考委員の講評と受賞者による研究要約を、学会 Web サイトでご覧いただくことができます。

[選考経過]

7月2日 広報担当常任理事の三浦先生に依頼して、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。

9月30日 応募を締め切った。総数42件の応募があった。

10月3日-10月14日 以下の基準で、理事から2名、一般会員から2名を選考委員として依頼し、下記の4氏について会長と常任理事会の承認を得た。

1. 応募者の指導教員、共同研究者ではないこと
2. 理事として、ほかの委員や役割を負っていないこと
3. 女性を一人入れること
4. 一人は昨年と同じ委員を入れること

■選考委員(敬称略)

理事より: 外山みどり(学習院大学), 浦光博(追手門学院大学) 一般会員より: 岡 隆(日本大学), 辻本昌弘(東北大学)

10月17日-11月30日 応募者42名の応募書類を全て、個人情報(姓名, 所属, 指導教員など)を黒塗りした上でPDF化したファイルを選考委員に送付し、第1次審査を依頼した。

■第1次審査

- ・選考委員はお互いに匿名で、独自に審査した。選考委員長は、指導学生からの応募があったため、審査には加わらなかった。
- ・選考委員の1人から、応募書類を精査したところ、自分か過去に共同研究もしくは研究指導を行ったと思われる応募が2件あるとの連絡を受けた。利益相反の観点から、その2件の応募については、評価得点をつけないようにしてもらい、他の3人の選考委員の評価の平均値を代入して、得点とすることで了解を得た。
- ・審査結果はA(優れている), B(普通), C(やや劣っている)で表記した。ただし、A評価は5本以内とした。

12月1日-12月4日

- ・第1次審査結果が出そろった。A評価は40点, B評価は10点, C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。この一覧表を元に、応募者の個人情報は伏せたまま、選考委員同士でメール審査を行った。
- ・得点を集計したところ、1位が同点で4名、それに5位が僅差で続き、さらに少しの差で6位が続くという結果であった。ただし、6位は一人の選考委員が利益相反の観点から評価を控えた応募であり、そのことが評価にどのような影響を与えたか慎重に検討する必要があると判断された。
- ・1位で同点の4名は確定として、
 - ①僅差で続く5位を授賞対象に加えるか、そして、
 - ②6位の応募について、ひとりの選考委員が評価を控えたことを踏まえた上で、授賞対象に加えることか、の2点について、2次審査を行って検討することで合意した。

12月5日-12月14日

■第2次審査

2次審査では、上記①②の観点について、選考委員会の意見を求めた。各委員から届いた意見を取りまとめたところ、①5位を授賞候補とすることについて全員が同意し、また、②6位となっている研究についても、再度、応募書類を読み直して、授賞候補とすることで問題ないという認識で一致した。

以上の審議の結果を受けて、1次審査で授賞対象として合意していた1位の4人に、5位、6位の2名を加えて、本年度の授賞対象候補者を6名とすることで決定した。

[選考結果]

■受賞者(応募書類受付順。氏名・所属・研究タイトル)

岩谷舟真・東京大学大学院博士課程1年・多元的無知の維持メカニズム—逸脱者罰と関係流動性に着目して—

白井理沙子・関西学院大学大学院博士課程前期課程2年・個人の道徳基盤が道徳違反に対する初期の知覚処理プロセスを決定するか

黒田起史・東京大学大学院修士課程1年・信頼を支える認知・神経基盤: Social Value Orientation が裏切り回避に与える影響の定量的検討

戸谷彰宏・広島大学大学院博士課程前期2年・死の脅威に対する対処行動の包括的理解に向けて: 世代・文化的自己観・愛着スタイルからの説明

田崎優里・広島大学大学院博士課程前期2年・“反社会的特性の社会性”の実証

土田修平・北海道大学大学院博士後期課程2年・象徴罰の進化: 強化学習と進化ゲーム理論の統合ルールを用いた理論的・実証的検討

Experiment: The Stanley Milgram Story ミルグラムの伝記、映画化される

三浦麻子

この会報に映画について書くのは2回目である。1回目は2003年2月に刊行された会報157号で、「es」(原題 Das Experiment)について書いた。ジンバルドの監獄実験を元にした映画で、「ボロカスに書きますが大丈夫ですか」と当時広報を担当しておられた先生に確認してから執筆し、さらに「さすがにもう少し穏当にならないか」とご指摘をいただいて修正したような記憶がある。今回14年ぶりにバックナンバーを見返すと本当にボロカスで自分でも苦笑した。

「Experiment」という映画がこのたび日本公開されるらしい、ミルグラムの服従実験を元にしてしているらしい、という情報を得て私が真っ先に想起したのはこの時の記憶だった。原題がほぼ同じだし、服従実験と監獄実験も「状況の(負の)力」に着目した作品だし、戦争などの忌まわしく理不尽な残虐さとも容易に結びつく。また好き放題脚色された内容になっているのではないか、もしそうならまたボロカスに書かねばならんのか...と思っただけというのが第一印象だった。

しかしこの予想は良い意味で裏切られた。ごく簡単に要約すれば、ミルグラムの(主に研究者としての)生涯を、服従実験とそれに関わるエピソードを核として、ごく淡々と描写した作品であった。もちろんある程度の脚色(あるいは日本語字幕における、専門用語としては誤訳とされそうなもの)がありはするのだが、ほとんど気づかないか、少なくとも歪曲とはならないようなものだった。

社会心理学を知っていればこそ意味に気づくディテールもたくさんあった。冒頭で例の「電気ショック装置」(米国オハイオ州にあるアクロン大学心理学博物館の提供とのこと)が登場するし、いかにも権威的な風貌のアッシュが登場した時には思わず声を出して笑ってしまったし、ミルグラム自身による記録映像も数多く挿入されていて、ドキュメンタリー的な色合いも濃かった。きちんと研究の記録を残し、またそれを公開することをためらわなかったという意味でも、ミルグラムは(ジンバルドも同様だが)他の研究者より一歩、あるいはそれ以上先を見通す明を持っていたと思う。

また、単にミルグラム自身の研究史をたどったというだけでなく、映画としての楽しみもある。スタンレーとサーシャ(アレクサンドラ)夫婦と子どもたちとのストーリーや、何かを暗示しているらしいと観客の想像をたくましくさせるシーンなどである。何を意味しているのかまだ読み解けていないシーンや台詞もいくつかある。例えば、ミルグラムというのはヘブライ語でザクロを意味する、とミルグラム自身が語るシーンが複数回登場するのだが、その含意は(旧約聖書にザクロがよく登場し、それぞれ何かを象徴していることは知っているが)まだ私にはよくわからない。また、敢えて詳しくは書かないが、ラスト直前のシーンには心を動かされた。

なお邦題は「アイヒマンの後継者 ミルグラム博士の恐るべき告発」である。控えめに言って、あまり好みではない。もちろん、言いたいことはわからなくはないのだが、また「ボロカス」想定をしたではないか。この映画には、原題の方が圧倒的にふさわしい。ともあれ、劇場で、あるいは将来DVDやブルーレイソフトとして販売された暁にはそれを、是非ご覧になることをお勧めしたい。きっと「社会心理学を研究するとはどういうことか」について改めて考える機会になるはずだから。

(みうら あさこ・関西学院大学)

公式サイト(オリジナル): <http://experimentermovie.com/>公式サイト(日本): <http://next-eichmann.com/>トーマス・プラス(著) 野島久雄・藍澤美紀(訳)(2008). 服従実験とは何だったのか—スタンレー・ミルグラムの生涯と遺産 誠信書房。
(映画制作の際に参考にしたと思われるミルグラムの伝記の邦訳)Smith, J. R., & Haslam, S. A. (2012). *Social Psychology: Revisiting the classic studies*. SAGE Publications.

(服従実験を丁寧に再考したチャプターがある社会心理学の入門書。2017年度中をメドに邦訳が出版される予定)

広報委員責任編集コンテンツ(6)「海外で過ごす在外研究ってどうなの？」

尾崎由佳

企画主旨

「在外研究」「研究休暇」「サバティカル」などと呼ばれる制度を持つ大学・研究機関があります。それぞれの制度は多少異なりますが、基本的には、一定期間(多くは6年程度)勤務した教員が数か月間から一年間ほど学務を離れて「休暇」をもらうというものです。その由来は、6日間働いたのちに7日目は安息日(sabbaticus)にすべしという旧約聖書の教えにあるとか。ただし、名目上は「休暇」であっても、その期間中は研究に専念して成果をあげることを求められる場合も多いようです。

在外研究期間を、日本国内で過ごす場合もあれば、外国で過ごす場合もあります。今回は後者、いわゆる「海外サバティカル」に注目しました。多忙な学務から解放され、世界で活躍する研究者に囲まれつつ、異国の地で過ごす日々...それは憧れでありつつ、なにやら得体の知れない世

界。いつかは自分にもチャンスが巡ってくるかもしれないという期待感もありつつ、でも実際どうなっちゃうの？ホントに大丈夫なの？という不安も入り混じります。すでに海外で暮らした経験のある方なら慣れたものかもしれませんが、私のように生まれてこのかた日本暮らしの純粋ドメスティック人間にとっては、まさに未知の世界です。そしておそらく、今後サバティカルを取る予定のある方々、そしていずれ研究職に就きたいと思っている学生の皆さんの中にも、同じような期待と不安を持っている人が少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。

ならば、経験者に訊いてみよう！というのがこの企画の主旨であります。今回は、小林哲郎先生(香港城市大学)、杉谷陽子先生(上智大学)、中西大輔先生(広島修道大学)にお話を伺いました。それぞれのご滞在状況(例:どのくらいの期間をどの国で過ごしたか、どのように滞在先を決めたか、単身/家族連れであったか)にはさまざまなバリエーションがあり、さらに「そんなところに想定外の問題が?!」と驚くようなエピソードも満載、今後在在外研究を取得することを検討中の方々へのアドバイスなども含めて、大変に盛りだくさんで興味深い内容となっています。もちろん、これらが海外サバティカルの全てを網羅するわけではありませんし、代表する例という保証もございませんが、こういう事例もありました・・・ということをご共有することで、皆様の一助となればと願っています。

(おざき ゆか・東洋大学)

小林哲郎

私は、2012年2月から2014年2月までの2年間、学振の海外特別研究員としてスタンフォード大学コミュニケーション学部に滞在しました。受入教員はマスメディア効果論で多くの業績があるShanto Iyengar教授でした。この在外研究に至るまでの経緯を簡単にお話しますと、2009年3月にスペインであった政治コミュニケーションの学会でIyengar教授に初めてお会いしました。実はその前から査読などでメールのやり取りをしたことはあったのですが、対面で話をしたのはその時が最初でした。その際に、当時Iyengar教授が行っていた移民に対する態度の国際比較研究で日本データが取れないかという相談を受けました。帰国後、研究資金を調達して日本データを取り、共同研究を開始しました。そして、2011年1月から3月までの間、短期間ではありましたが当時所属していた総研大の若手教員海外派遣事業という制度の支援を受けて、スタンフォード大学で在外研究を行いました。この時、私はスタンフォード大学が大変気に入ったので、Iyengar教授に海外学振の受入教員になっていただくように依頼し、帰国後に応募しました。



採択が決まったのは確か8月くらいだったと思いますが、すでに一度滞在していたので特に準備で困ることはありませんでした。おそらく在外研究をされる方の最初のハードルは家を探すことだと思います。私の場合は日本にいる段階からスタンフォード大学日本人会のメーリングリストに加入し、情報を集めました。運よく、私の渡航直前に日本に帰国される方が部屋の引継ぎ先を探しており、大学にも近かったことからここに決めました。特に事前に渡航して確認したりはしませんでした。部屋の写真を送っていただいたりしたので非常にスムーズに入居できました。また、家具や生活用品だけでなく車も譲っていただいたので、渡航当日から不自由なく暮らせたのは幸運でした。

在外研究には家族と一緒にいられる方も多いと思います。私の場合は娘をスタンフォード大学内のプリスクールに通わせることができました。何度もメールをしても全く返事がなかったのですが、直接行って先生と話すことで空きがあるときに連絡をもらうことができました。これは海外ではよくあることだと思いますが、「とにかく行ってみて人に会って直接お願いする」というのが有効です。色々なところにメールだけ送っていても何も事が進まない、というのはよくあります。また、私の場合は現地で息子が生まれたのですが、海外学振の場合は受入大学との雇用関係はありませんので、妻の妊娠・出産をカバーする保険の費用はすべて自己負担でした。これに加えてスタンフォード大学のあるベイエリアは家賃が非常に高いので、生活に関する出費はかなりかさみました。毎日為替を気にしていたのをよく覚えています。

とはいえ、やはり世界のトップ大学での在外研究は非常に得るものが大きく、本当に貴重な経験ができたと思います。ネットワークも広がりましたし、セミナーや授業への参加で多くの刺激を受けました。また機会があれば是非行ってみたいと思っています。これからサバティカル等で海外へ行かれる予定の方は、なるべく国際会議に出て海外の知り合いを増やしておく、受入をお願いしやすくなると思います。スタンフォード大学でも、学部によっては在外研究をする際に滞在費用を支払わなくてはならないところもあると聞きました。特に人気のある大学ではこうした在外研究員の受入を収入源の1つとしている研究室もあるようです。事前に知り合いがいるとこうした情報も知ったうえで受入を依頼できるので、後から困ることも少ないと思います。

(こばやし てつろう・香港城市大学)

杉谷陽子



私は現在、北イタリアのヴェネツィアにあるCa' Foscari University(日本名:ヴェネツィア大学)の経営学科にVisiting Scholarとして所属しています。在外研究期間は、2016年10月～2017年3月までの半年間で、もう間もなく帰国するところです。

私の研究分野は消費者心理学なので、周りを見ても、在外研究はアメリカに行くというのが王道でした。ただ、だからこそ、私はあまり多くの日本人が行っていない国の大学の雰囲気を見たい、と思いました。イタリアのsmallビジネスは、日本やアメリカのビジネスモデルとは考え方が大きく異なると聞いたのも、イタリアに関心を持ったきっかけでした。豊かな文化と長い歴史を持ち、ラグジュアリーブランドを多数輩出するイタリアで生活する消費者は、リーズナブルで高品質な製品で溢れた日本の消費者とは、全く違った考え方をするのだろうかという気がしました。そういった文化差が自分の研究仮説にどう影響を与えうるか、現場を観察しながら考えてみたいと思いました。

研究以外の理由としては、車がなくても生活できる国(地域)に行きたい、というのが私の譲れない条件でした。私は車の運転は好きですが、ド下手かつ方向音痴なので、海外で運転なんて怖くて考えられませんでした。いくつかの大学が候補となった中で、ヴェネツィアは「自転車も含め一切車両通行禁止で、移動手段は船か徒歩のみ」と聞いた時、「ここだー!」と思いました。

ですが、それはヴェネツィアの良い面でもあり、悪い面でもありました。車が全くないというのは、重い荷物を運ぶ時や、体調が悪い時などには身体にゆえました。また、街全体が世界遺産で、新しい建物や設備が導入できないため、アパートの水回りの悪さには閉口しました。役所の仕事が遅くていい加減なものにも幾度となく泣かされましたし、郵便物が行方不明になったり、玄関前に捨てられていたり…ということもありました。

イタリアに限った話ではありませんが、海外の先生との共同研究が上手くいくかどうかは、相手と研究テーマが合うかではなく、性格が合うかの方が重要だと痛感しました。私はホスト教員とはあまり親しい間柄ではなかったのですが、途中から方向性が合わなくなってしまい、結局、ヴェネツィア大学の他の先生や、フィレンツェ大学の先生方と一緒に共同研究を進めています。ちなみに、あくまで私の個人的感想ですが、北イタリアの男性はシャイで真面目な方が多く、いわゆる「イタリア男性」のイメージと全然違っていたことは大きな驚きでした。礼儀作法や気の使い方など、日本人に感覚が近くて、お互い第2外国語(英語)での会話という制約があるにもかかわらず、研究を進める上での意思疎通は非常にやりやすく感じます。

最後に、今後在外研究を考えている方へのアドバイスがあるとすれば、海外生活は本当に本当に大変で、想像もしないようなトラブルが起きるので、「面倒見の良い」研究者をホスト教員として見つけておくことが最重要だと思いました。英語圏以外に行く場合は、特にそうです。

在外研究は大変ですが、苦勞した分だけ、人生にも研究にも大いに得るものがあると思いました。迷っているならば、挑戦してみる価値は絶対にあると思います。

(すぎたに ようこ・上智大学)

中西大輔

2015年8月末から2016年2月まで家族で半年ほどイギリスのレディングに滞在しました(実際には半年で帰ったのは私だけで、妻と子どもたちは1年間おりました)。半年ですから、ビザも取らずに行く予定だったのですが、レディング大学でHonorary Research Fellowの地位を得た方が何かと便利ということで、妻だけではなく私もビザを取得することにしました。受け入れ教員としてレディング大学の村山航先生にお願いをしました。6ヶ月以内の滞在であれば特別のビザは不要ですが、研究員の地位を得るためには必ず取らなければいけません。ビザはBusiness VisitorカテゴリのAcademic Visitorというものを選びました。



病気の際にはNHS(National Health Service)で無料のサービスを受けることができます。とはいえ、NHSのサービスはとても不便で、熱を出した子どもを連れて行くとなると3時間以上は待たされます。待っている子どもにサンドウィッチを出してくれたりしますが、そういう問題ではないだろうと思います。ご存知のように、英国ではGPs(General Practitioners)というかかりつけ医の制度があります。向こうについたら近所の医者に登録をしいきます。専門医に掛かりたい場合には必ずGPからの紹介状が必要で、数ヶ月待たされることもあります。これではとても使えませんので、すぐに診てもらえるPrivateの専門医を利用することもあります。これがかなり高額です。PrivateのサービスはGPの紹介もいりませんが、一度で数万円の支出が必要になります。そうしたサービスを利用したいときには日本国内で保険に入っておいた方がいいでしょう。代わりに予約もしてくれますし、タクシー代も出ます。こうした医療サービスについては子連れで滞在する際にはとても大事なので現地の情報をあらかじめ調べておいた方がいいでしょう。Brexitの際にNHSのサービスについての議論が盛んでしたが、そこに英国国民の不満が溜まっているのは(原因帰属が合理的かは別として)よく理解できる話です。

子連れで滞在する場合のもう一つの問題は学校です。上の子は日本では小学3年生でしたが、誕生日の関係で、英国ではPrimary Schoolの5年生になりました。大きな都市の場合には日本人学校という選択肢もあるのでしょけれど、レディングにはありませんし、ロンドンに連れて行くのもたいへんなので、事前の下見をした中から郊外のわりとのおんびりした学校に入れました。学校を選ぶときにはOfsted(Office for Standards in Education)のレポートで評価を確認するのがおすすめです。

滞在中に国語の勉強が心配な場合には毎週土曜日にロンドンの補習授業校に連れて行くという手もあります。うちの子は親に似て勉強が嫌いなので連れて行きませんでした。ロンドンに滞在している有名な女性歌手も子どもを補習校に連れて来ていて、そんなことなら息子を説得して連れて行けばよかったと後悔しています。レディングには公文式があったので、息子は算数だけ通わせました。スタッフには日本人もいましたが、インド系が多く、教材は日本と同じものですが、英語です。

学校に子どもを入れるのはたいへんです。何がたいへんかという、申請をして1ヶ月経っても全く役所から連絡がないのです。学校に入れるまで相当かかりました。下見に行った小学校の校長先生にその件を訪ねると「私なら毎日役所に電話をして催促する」とアドバイスをもらいました。役所の仕事はとてもゆっくりしています。

下の子の保育園もたいへんです。長男の小学校と同じ敷地にある保育園は週に3日しか見てくれないので、他の日は追加の費用を払って別の保育園に連れて行きました。保育園も小学校も必ずお迎えが必要ですが、帰る時間が異なるので、一日中送迎しているような気分になります。そのため、小学校の近所は毎朝送迎の車で大渋滞です。この小学校までは自宅よりさらに郊外にあり、車で20分ほどかかる位置にありましたので、自動車の入手も必要でした。自動車保険の支払いで日本のクレジットカードが使えず(しかも銀行口座の開設が間に合わず)、中古車屋のクレジットカードで立て替えてもらいました。あちこちで日本のクレジットカードが使えないケースがあるので、銀行口座は早めに開設しないといろいろ面倒です。

銀行口座の開設には住所が必要で、その住所を証明する書類を添付する必要があります。公共料金の請求書でよいのですが、どの書類も適当なので、「Nakanishi」の綴りのどこかが必ず間違えており、おかげで開設が随分遅れました。唯一綴りが間違えていなかったのは、進入禁止のバスレーンを走ってしまった時の罰金の請求書だけでした。バスレーン進入は4度ほどやりましたが、全てカメラに取られてしっかり反則金を取られました。このように英国にも例外的に仕事熱心な部署があります。

研究の話は全く書きませんが、とにかく私は外国が嫌いで図書館にこもって原稿を書くくらいしかしていないし、多分他の方が書いてくれると思うので、このくらいでお許しください。
(なかにし だいすけ・広島修道大学)

『社会心理学研究』 過去巻号の J-STAGE 公開・完了しました

『社会心理学研究』は第30巻からJ-STAGEでの電子ジャーナルの運用を開始しており、第32巻からは早期公開も実施しています。現在、第1巻から第29巻までの過去巻号についても、J-STAGEでの公開作業が完了し、すべての巻号がJ-STAGEで閲覧できるようになりました。どなたでも無料です。従来PDFによる本文収録を実施してきたCiNiiでのPDF提供は第30巻1号までとなりますが、CiNiiのサービス終了(2017年3月末日)後も継続して閲覧可能です。なおCiNii掲載の論文ページからは、「外部サイト」というリンクボタンでJ-Stage当該論文ページに遷移できるようになっています。

J-STAGE「社会心理学研究」URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jssp/-char/ja>

会員異動 (2016年12月16日~2017年3月14日)

入会

《正会員》

・一般

河原郁恵(奈良女子大学男女共同参画推進機構キャリア開発支援本部)

退会

酒井光雄

所属変更

竹橋洋毅(関西福祉科学大学心理科学部)、森本裕子(東京都医学総合研究所心の健康プロジェクト研究員)、小島奈々恵(東北大学高度教養教育・学生支援機構学生相談・特別支援センター)、菅 忍(みやざき縁パワープランニング事務所)、北梶陽子(広島大学ダイバーシティ研究センター助教)、榎原良太(鹿児島大学講師)

『社会心理学研究』 掲載予定論文

第32第3号(2016年3月刊行予定)

《原著》

榎原良太 認知的評価は認知的感情制御と精神的健康の関連をいかに調整するか

三浦麻子・稲増一憲・中村早希・福沢愛 地方選挙における有権者の政治行動に関連する近接性の効果: 空間統計を活用した兵庫県赤穂市長選挙の事例研究

編集後記

東日本大震災から6年が過ぎました。震災に関連する社会心理学研究は徐々に蓄積されつつありますが、震災に際して、一市民としてだけでなく研究者としてできることを自分たちなりにあらわす努力は、これからも長く続ける必要があるのではないのでしょうか。

さて私こと、委員だった頃を含めて8年間にわたって日本社会心理学会の広報活動に従事してきましたが、この年度末で任期満了となります。会報は200号から作成に携わり、Twitterは2009年12月にアカウントを作った時からずっと「中の人」を続けてきました。研究活動のように、専門家からの的を射たリアクションが次々ともらえるわけではありませんが、眠っている客層をどう掘り起こそうかと工夫をできる余地がある活動だとも言えます。社会心理学という学問領域を支える社会的基盤を少しでも厚くするための活動だと思えば、すべてが楽しく挑戦性の高いプロジェクトで、とても有意義な経験ができました。ご協力・ご指導ご鞭撻下さったすべての方々に、心からの感謝を申し上げます。(asarin)